

抄録

「視覚からみた学習の困り」

かわばた眼科院長 眼科医 川端秀仁

視覚、聴覚の果たす役割は学習の場では特に大きい。正しく見えていない、よく聞こえていない状態で学習を進めることが難しいことは、言わずもがなである。

視覚は、①外界の情報を取り入れる入力系（＝視機能：視力、屈折、調節機能、眼球運動、両眼視機能など）、②入力された情報を処理する視覚情報処理系（形態、空間位置関係、動きなどを認識する機能）、③視覚情報を運動機能（読み、書き、目手の協応など）と連動させる出力系から成る。これらの機能が円滑に機能していない場合、それぞれの段階の不調が関係して、①よく見えない、正しく見えない、遠近感がないなど、②見ているものの意味がわからない、覚えられないなど、③漢字が覚えられない、マスに文字が収まらないなど、ボールがキックできない。などの問題が生じることがある。学習障害の定義から視覚機能の問題は除外されているが、学習障害児を含む発達障害児では視覚の問題が見逃されていることも多い。本講義では様々な症例を交えて視覚機能と学習についてお話しする予定である。

「聴覚からみた学習の困り」

国際医療福祉大学病院 耳鼻咽喉科部長・国際医療福祉大学 教授 中川雅文

学習が困難な子どもに直面するとき、わたしたちは「どれくらいできるのかな？」とか「どのくらいできないのだろうか？」と結果にばかり目をうばわれてしまいがちです。しかし、実際は、「なぜその子は学習しない（学習に取り組まない）のだろうか？」とか「その子にとって最適な教え方（学びの環境）とはどうあるべきなんだろう？」と子どもたちの抱えている課題を明確にしながら取り組むほうが、より高い効果をあげることが可能です。

医師の立場からは、お子さんの学習の困難さに気づいたとき、まずその困りの原因が、視覚や聴覚や皮膚感覚といった感覚器に問題がないか まず目を向けて欲しいとつねづね考えています。特に視覚や聴覚に因する問題を抱えている場合には、指導法の工夫や環境の調整によって劇的な改善を得ることが出来るからです。

本講演では、「聴覚からみた学習の困り」と題して、「きこえ」というキーワードから、発達と感覚統合、記憶と五感、異種感覚の干渉と認知のゆがみ、ことばの発達と学習、文脈の成長について、その仕組みを解説し、どのような取り組みによってそうした課題を解決していくことができるか。その処方せんをみなさんにお伝えしたいと思います。お子さんのために明日から役立つ発達支援の実践とコツと工夫をいっしょに学んでいきましょう。

「視覚認知検査について」

視覚発達支援センター センター長 築田明教

近年、発達障害がクローズアップされ、それに伴い、視覚認知やビジョントレーニングも注目されるようになった。しかし、名前だけが一人歩きし、検査結果の理解が不十分だったり、検査結果を元にトレーニングの組み立てが出来る施設はいまだ少ないのが現状のようだ。当センターでも他機関にて実施された検査結果を持ち、結果の解釈やトレーニングを希望される方は少なくない。

児童の学習の困りには様々な要因がある。基本となる注視ができなければ視作業に集中することができない。衝動性眼球運動に問題があると音読時に読み飛ばしや重読につながる。追従性眼球運動に問題があると、ボール運動の苦手さの原因になる。形の特性を理解できなかったり、視覚記憶の弱さがある場合、文字学習や図形問題などの苦手さにつながる。また、操作や協調運動といった目との協応ができなければ書字や運動の苦手さにつながる。

視覚認知発達検査の下位項目は多岐にわたり、児童の困り感に対して、検査項目を組み立てる必要がある。

今回は当センターが実際に使用している代表的な視覚認知検査と下位項目を説明し、各検査結果の読み取りといくつかのトレーニング例について紹介する。

「聴覚認知発達検査について」

国際医療福祉大学 准教授・言語聴覚士 小淵千絵

聴覚認知検査では、標準純音聴力検査や語音聴力検査などの一般的な聴覚検査では分からない聴覚機能を測定することが可能となる。しかしながら、多側面の聴覚認知を評価することができる標準化された検査は未だ確立されていない状況である。本報告では、聴覚認知に関する基礎的な概念を概括すると共に、海外で普及している聴覚認知検査の5側面に相当する検査（両耳分離聴検査、低冗長性検査、時間情報処理検査、両耳融合能検査、聴覚識別検査）を含んだ新しい聴覚認知検査（試案）について、その特徴や方法について概説する。さらに、聴覚的注意や聴覚的記銘に関する検査を加え、総合的に聴覚認知を測定する手法について紹介する。

特別講演「スマホ・タブレット時代の学習困難な子供の教育」

東京大学先端科学技術研究センター 教授 中邑賢龍

スマホやタブレット端末などICT(情報通信技術)製品は、我々の読み・書き・計算・記憶・コミュニケーションなどの能力を補助・代替するツールとして生活になくてはならないものになってきた。これらのツールはまさに学習障害の子供たちの認知的困難さを補うものであるが、学校においてはその使用を禁止する場面が多く、訓練によって大きな改善の見られない子供の学習の遅れ、自信や意欲の低下をもたらしている。眼科領域で言われる視力は矯正視力とされるように、学校にでも裸知能ではなく矯正知能を学習の基礎要件とするような意識改革が必要であろう。社会への人工知能の浸透は、覚える事や判断することすらICTに置き換えられる可能性を示唆している。知識を覚える事を要求する教育からクラウド上にある知識を活用する事を求める時代への流れの中で学習障害の概念と教育も大きく変わるに違いない。